

Y10b 放送型通信を用いたインターネット中継による講演会の実施例とその評価

縣秀彦、並木光男（国立天文台）、相川成周（日大）、五島正光（巣鴨高）、山本泰士（電通大）、中山雅哉（東大）

国立天文台公開講座「宇宙を解き明かす 21世紀の電波天文学」(2001年2月3日実施)にて、放送型通信 Real を用いたインターネット中継を行なった。これは、今回 VERA と ALMA という最新の電波天文学プロジェクトに関する講演のため、一般市民にはあまり関心が無いのではないかと予想がはずれ、往復はがきによる講演受講申し込み数が280名を超えたため、入場数を制限し、急きょインターネット中継を行ったものである。

講座終了後に直接受講者(179名)と遠隔受講者(21名)を対象にアンケート調査を行い、受講者にとって講演内容をどの程度理解できたと感じたかと講演参加への満足感を調査した。その結果、内容理解の印象には、ほとんど差が生じなかったことと、講演参加の満足感は遠隔受講者のほうが低かったことが分かった。また、遠隔受講者の満足感と相関のある因子は、「疲労・画質」因子と「臨場感・音声」因子であることが分かった。また、育児中の女性からは、「インターネットもバリアフリーの一つだと強く感じた。育児中の人、介護を受けている人、身体の不自由な人、遠方のため参加できない人等にとって、このような中継はとても有り難いもの」との回答をいただいた。

今回の結果より、研究機関や大学等が研究活動の理解増進のための一般市民向け講演会で、放送型通信を用いたインターネット中継を行う場合、画質と音声に関する中継技術に一定の注意を払う点と、中継に対する講演技術を高めることで、効果的な教育・普及事業を実現することが可能であると推察される。